

## 第8回ピースポート「旅と平和」エッセイ大賞 次点作

### せつじつ、せつじつそのままで／田高夏希さん

太陽が明るく人々も陽気、そんなイメージの通り、とても平和な場所だった。短い旅ならきつと、最高の街！で終わっていたらう。

だが、暮らす中で出会った「不寛容の種」は、明るい陽に差す濃い陰だった。

昨年の秋から、一年間の交換留学に来ている。海外に長く住むのは初めての経験。留学先はスペイン南部アンダルシア地方のセビリアだ。中世にはムスリムの王国に支配され、イスラム文化の影響が色濃い場所だが、後にキリスト教の王国に追放され、ユダヤ教徒、イスラム教徒はほとんど残っていない。この街でスペイン語とスペイン史を学び、異なる信仰や文化を持つ人々の共存について考えようとは私は来た

あくまで他人事として学びに来たつもりだった。自分自身がこんなに差別を受けるなんて、思ってもみなかったのだ。

到着して間もない頃。地元民が多い店で日本人の友達と食事していると、店員の一人が私達を見てあからさまに顔をしかめ、「おれ中国人嫌いだから、ちよっと奥行くわ」と、遠ざかった。他の店員達も「早く帰れ」という内容の歌を、私達の方を目配せしながら歌い始めた。スペイン語がわからないと思われていたようだが、私は彼らの会話を聞いて怒りが込み上げ、何の味も感じなくなった。なぜこんな屈辱を受けるの。なぜ私はここにはいけないの。それ以来、観光客向けのレストラン以外は行かなくなった。

街に出れば毎日必ず「チナ、チナ（中国人）」と道行く人達に言われる。遠くからでもわざわざ指差して大声で。日本人と中国人の見分けがつかないのは仕方ない。けれど、明らかに悪意を持ったものが多い。すれ違い様に「帰れ、豚どもー」とささやかれたり、バスに乗れば「チナなんかのために停車する必要ないだろ」と公の場で侮辱されたり、ひどい時には空き缶を投げつけられたりもした。

初めは怖がるばかりだったが、中国人が嫌われていることはわかってきた。スペインにはコンビニが無い代わりに、中国人が経営している小売店がどこにもある。飲食物から日用品まで安く売る便利屋だ。その姿に卑しさを感じたためだろうか。

「チナ」という言葉そのものを侮辱と受け止めるほど、敏感になっていく自分にも驚いた。自分の中にも、中国人と一緒にされたくないという、差別意識が潜んでいるのだ。中国には訪れたこともあるし、友達もいるのに。とにかくスペイン人に敵視されるのが嫌で、必死に日本人だと弁明していた。

辛い時は、日本人留学生同士で不満を打ち明けた。皆同じような経験をしてきた。「想像してたよりずっと保守的で排他的な人たちだね」「スペイン人はほんとに不躰だよ。教養が低いんだよ」「中国人はうちらと違うよ。日本人はあんな安物売ったりしないし」同じ価値観の仲間と慰め合い、相手が程度の低い人間なんだと思ってしまうは少し気が楽になった。そう思うことでしか、自分を肯定できなかった。

日本から妹が訪ねて来ていた時のこと。少し混んだバスで、数人の若者に絡まれた。自分一人ならやり過ごせる。でも妹に何かされたらと思うと怖い。

「二一八才。お前たちどこで働いてんの。」ピアスをたくさんつけた20代後半くらいの青年が、うつむく私たちに声をかけてくる。話しかけないで。見ないで。ほっておいてよ。普段なら無視するが、身動きがとれず逃げ場がないので、仕方なく答えた。

「私は中国人じゃないし、ここで働いてない。日本人だ！馬鹿にしないで！」

妹を守らなければという意識のためか、敵意むき出しで言い返していた。彼はちよつと驚いた顔をし、「ごめんよ・・・じゃあ日本語でオラって何て言っただ？」申し訳なさそうに聞き返して来た。その時私は、過剰に尖っている自分に気づいた。全て悪意に受け取っていたけれど、ただの好奇心で話してくる人もいたのかもしれない。冷静になってみれば、中国人と間違えられただけで、侮辱の言葉を言われた訳ではない。ネガティブに受け取りすぎなくても良かったのかもしれない。

相手にするだけ無駄だと友達は言うけれど、私は彼らに向き合ってみたくなかった。「アジア人をどう思う？中国人が嫌い？どうして？」地元の人々と話す機会がある

度に尋ねてみた。返って来た答えは様々。「日本のアニメは好きだよ。」「日本人も犬を食べるんでしょう。」「スペインに住み着いている中国人マフィアのニュースを見た。勝手にこの国で金を稼いで、何か企んでいるような中国人は気味が悪い。」「中国人の方が日本人より目が細くて顔が汚いよね。」「私が日本人だとわかると、皆ペラペラと語ってくれた。でも「アジア人」の自分としてみれば、中国人の悪口を聞くのも嫌だった。

無知だからこそ抱くネガティブなイメージ、根拠のない差別、そして不景気な社会への不満と逆恨み。

スペインでは経済危機のために失業率が上がり続け、学校を卒業しても仕事がない若者が多い。ホストマザーも「私の息子には仕事がないのに、どうしてチナのお店は繁盛しているのかしら」とよくため息をついている。

景気が悪い時、人々は他者に不寛容になる。この「不寛容さ」は、とても危険な種なのではないか。歴史を学んでも、中世スペインのユダヤ人、ムスリムの追放も経済的に豊かな彼らへの不満が溜まったことが要因だった。中国系移民の虐殺や追放が起こるなどは考えたくないが、社会が平和でなくなる過程には少数者への攻撃がある。近所の中国人も、親が失業したスペイン人の子から娘が学校で嫌がらせを受けることが多くなり、心配だと言っていた。

けれど、「別に中国人は嫌いじゃない」という人も多い。ではなぜわざわざ遠くから「チナ」と声をかけるのかというと、ここでは感情や思ったことを隠さず声に出すのが普通で、道で女の子に声をかけるのも習慣らしい。「日本人の感覚では失礼なのかもしれないけど、皆が悪意を持っているわけではないよ。思ったことをそのまま口に出しているだけ。」「広場でおじさんが話してくれた。

気持ちの表し方も、「無礼」の感じ方も、自分たちとは異なる人々。わかり合えない時に、相手を劣った国民だと決めつけ、全否定してしまっにはいけないと悟った。私は、初めてマイノリティになった怖さから、「スペイン人は野蠻」なんて一括りにして心を閉ざしてしまうところだった。自分の常識で、彼らの人間性を推し量ることはできない。理解できないところも、受け入れるしかない。

同時に、アジア人としての自分にぬぐえない劣等感があるから、神経を尖らせてしまうのだとも気づいた。どうしても欧米の方が上という価値観があり、引け目を感じてきた。大きな目、高い鼻の彫深い顔が「美人」の基準で、一生懸命に化粧で目を拡大している日本人の女の子たち。ホームステイ先の子どもを日本の友達に見せると「ヨーロッパの子はやっぱり可愛いね。お人形みたいだね」という反応が返ってくる。そうじゃない。私たちが与えられた「お人形」が、欧米の子に似せて作られたんだ。ヨーロッパとアジアの優劣の感覚は、子ども心にも浸透している。ホームステイ先の団地に住んでいる小学生の男の子達が「おまえ、ここに住んでるの？チナのくせに」と、目尻を手で引っ張ってキツネのような顔をしてきた。目の細い中国人の物真似だ。楽しそうな笑いが、蔑んだ笑いに聞こえる。

7

もっとそのまま、認め合えればいいのに。どちらを低めることもなく、受け入れ合えればいいのに。自分にも他人にも寛容になりたい。どうしたらいいのだろう。

限られた情報の中で芽生える偏見。この壁を乗り越えて敬い合うためには、「互いを知ること」しかないと思う。自分と違う常識のベクトルを持った人々を知り、世界はもっと多様なんだと気づきつかげがあれば、自分の正義を押し付けるのをやめる、他者を排除するのをやめる一歩になるはずだ。

私は、この街で「伝える」ための行動を起こすことにした。まずは自分の国のこと。私達がどういう文化を持っているのか。「アニメとゲイシャ」しか日本を知らないスペイン人があまりにも多くて驚いたからだ。

今年日本とスペインの初交流からちょうど40周年。40年前、伊達政宗の家臣・支倉常長が船旅の末、ここセビリアからスペインに入り、当時の国王に謁見した。これを記念して大使館が民間の企画を募集している。私はこの機会に、セビリア市内での文化交流イベントを開こうと考えた。アジアに興味を持っている学生たちを集めて呼びかけ、40年前から現在までの日西文化交流の歴史の展示、日本の食べ物、歌などの音楽、折り紙など日本の昔遊びにも触れられる催しを企画している。また支倉常長が発見したのが宮城県石巻なので、東日本大震災についての展示も行う予定だ。まだ準備中だが、今年の夏には開催する。

8

日本でバレンタインに欠かせないチョコレートは、支倉常長が初めて口にしたもの。フラメンコにも使い、スペイン土産として人気の扇子は、日本で生まれたもの。今の私たちの生活は、文化が交わり合った歴史の積み重ねだ。そこには、異国に最初に飛び込んでいった人達がいたのだ。差別を受けたかもしれない。自分の常

識が通じない場所で戸惑ったかもしれない。それでも胸を張って自分たちの文化を伝えた人々がいたのだ。

私はこの催しを、日本文化を紹介して楽しむだけでは終わらせたくない。日本とスペインの接点をわかりやすく示し、アジアと自分たちの繋がりについて、特に子ども達に好奇心を持ってもらえるようなものになりたい。分厚い心の壁を、子ども達に築いてほしくない。興味を持ち、近づいてみようとするのが、他者と共存するために必要だと思っからだ。

差別は、心で生まれる見えない武器だ。

私は、居心地の良い母国を離れ、初めて差別される側になった。自分でも驚くほどに心が荒び、逆にスペイン人と中国人を無意識に蔑もうとしていた。受け取った憎しみを、それ以上に自分の中で増してしまっていた。しかし、それでは同じ場所で暮らせない。怒りを脇に置き、相手を理解できなくてもそのまま受け入れる姿勢が大切なのだ。そして、歩み寄る努力を続けることも。

日本、世界の中のマイノリティの人々について、もっと知りたい、もっと多くの人と話してみたい。そして、異なる人間同士がもっとそのままに、その多様性を

認め合う「寛容さ」をどう実現できるか。それを一つのテーマにして生きていきたいと思っ。